



まつい由美子

- Salade de fruits -

2023.3.11sat-3.26sun

まつい由美子は自然の中で溢れる色彩の再現を試みながら、心に何かが残る情景や静物を主に描いてきました。その作品は観者に寄り添いながら、観者と共に空想や、ノスタルジーに浸り、いつくしむ旅をこれまで提供して来ました。

前回の個展から2年半がたちました。世の中は変わりましたが、自然は粛々と四季の営みを続け、時には希望を感じさせてくれます。まつい由美子は、この2年の間の取材の旅を通して、自然界の身近なひとコマである果樹、果実を対象に絞り新たな技法で描き始めました。

「樹になっている果実はどうしてこんなに気持ちを豊かにしてくれるのだろうか？」その自然の賜物が与える様々な歓びを、アクリル絵画、コラージュ、水彩画によって表現しました。是非ご高覧下さいませようご案内申し上げます。

倉科敬子 ギャラリスト 1010美術

2022年の1月、瀬戸内海に浮かぶ小さな島の「レモン谷」と呼ばれる場所に車を止め、農道をゆっくりと上がっていった。高台にある畑の眼下には海が広がり左手に島をつなぐ大きな橋がかかっている。潮風の中でそろそろ収穫を終えようとするレモンが黄色い実をつけている。

コロナ禍でデジタル化がさらに進み、日々のくらしの様々なシーンでスピード感をもって回答を求められる時代。長く都会に暮らす私は、街の中で誰かの庭に果実がなっているのを見かけると心が安らぐ。この展示にあたりフルーツをテーマにした理由は何かと聞かれれば数えきれない。フルーツはどんな場所でどんな気候で育つかで大きく出来栄えが違ふ、これは人も同じだ。そしてそれがひとつところに集まっていればフルーツサラダのようなものだ。果樹園では、離れたところから見れば集合体だが近づいて選び、ひとつもいでみれば自分にとって特別な一つになった。スーパーマーケットでは、並んでいるほぼ同サイズの果実は選ばれし精鋭だが、購入者にとっては平凡な普段通りのシーンだ。フランスの名画の中に果実を見れば、このように個体によって大きさも色も異なる実は、現在の都会では手に入らなくなった美しさだ、などと思う。フルーツはたくさんのかたちを語りかける。実をつけるには一年という時間がかかる、そして全て採ってなくなってしまうてもまた再び実をつける時が来る。「しかしそれは前とすっかり同じものではないのです。」とさわやかな見た目でも様々な答えを楽し気に語り掛けてくる。

まつい由美子

